

鳥追舟



勝手口の椿が溢れんばかりに咲いている。根元の萌えだした草の上に、まるでゴブラン織りの絨毯のように黄色の芯を見せて真っ赤な花が折り重なって散っているが、なおも枝々がしなうほどに花や蕾を着けている。細い樹なのに、痛々しいほどに懸命である。その樹の懸命さに自分を重ねながら、今年もエンジンを始動させる季節になったと思う。

花水木会の発端は、平成十年が渋谷氏の関東から下向して七百五十年に当たることから、それを記念する行事を行って、町起こしの役に立てようということから始まった。

それは町役場の「会費一万円も払って、こんな山の中に来る人などいない」という反応に反して、大成功だった。当日の三木靖先生の講演が未完だったことから、来年もという声があった。翌年の講演後のイベントにと「薪能」を始めたという訳である。その後三木先生のご都合が悪かったことから、薪能だけが単独で歩き始め現在に至っている。

第一回の薪能の時は、スタッフ全員がまだ一度も能を見たことがなかった。私は恩師で企画を引き受けて下さった若松健先生が、岡山の最上稲荷で薪能を開催していることを知っていたので、まず実際を見学することに決めたのだ。た。

平成十一年八月十七日朝七時、ワゴン車に支援会の会長、音響照明担当、会場設営担当、舞台を作る大工さん夫婦と私に乗って出発した。下関で昼食。四時前には会場に到着出来たので、開演前の二時間ほど、それぞれが担当部署を实

地見学し調べた。翌朝は又、早々に揺れるワゴン車での帰宅である。一週間ほど腰が痛んだが、その見学は正解だった。

その会場で、ある音楽師専属のカメラマンが当方の鹿児島弁を聞きつけ声をかけて来た。

「鹿児島から来たのでしょうか。私は宮之城出身ですよ」

という。余所で会った時の鹿児島県人意識は信州人には分からないものがある。彼は

「鹿児島には川内が舞台になった『鳥追舟』という曲もあるんですよ」

と教えてくれた。大阪在住の彼は、その後「入来新能」の度にカメラを担いで来て下さって、立派な写真を送って下さっている。

大きな赤字が出ているものの、新能自体は毎回大成功で、大勢の方の感動の声を聞く。年末に文化協会で見学に行った末吉町の教育委員会の人たちからも「感動した。来年も期待している」と言われて、こんなにも遠方からも来て下

さっているを知って感激した。

今年は会場の清色城址は小学校の立て替えがあつて開催出来ない。入来町自体は積極的に支援してくれていないし、私的な負担も限界である。当分はパスするしかないと思つ一面、若松先生や観客の方々の期待を裏切ることも出来ないあと悩んだことだった。

川内市にある泰平寺は、かつて秀吉の本陣が置かれ、義久が降伏した場所である。若い住職の羽坂光昭氏は福岡出身だが、この名刹の復興に大変努力をしていて、「和睦の寺」として広くアピールしている。独自の劇団も組織していて、オリジナルな脚本で近辺で公演活動もしている。彼は第一回の新能が終わつての秋、我が家を訪ねて来たことがあつた。そして「川内は『鳥追舟』の里です。川内で新能をやりたいかった。先を越されました」

と言つて帰つた。また去年のことだ。川内市まちづくり公社の前平事務局長がいらして「和

泉元彌」の狂言の公演を企画しているが売れ行きががくばしくないと。聞くところ人気のある狂言師とはいえ、狂言だけで、本格的な能である「入来新能」よりも入場料が高かった。次回はお互い相談して企画しようと話し合ったことだった。

川内市と合同で出来れば、この難局もなんとかなるかも知れないと考えて、お二人に相談すると嬉しいことに、どちらも積極的に賛成して頂けた。まちづくり公社の理事長も兼ねていらっしゃる川内市長森卓郎さんも早速に賛同して下さった。

若松先生は他の曲をお考えの様だったが、泰平寺の和尚さんの強い願望で、「鳥追舟」と決まった。これは今までよりワキツレと子方の二名が増えるばかりでなく、ワキも上級な人でなければならぬということで、京都の先生をお願いする。ハタラキというお手伝いも一人増えて費用は相当かかるのだが、後々にも川内市の

記録に残ることを考えれば、ここは頑張るしか仕方ない。

二月末、事務局長、和尚さんとその仲間、花木会支援会の面々が我が家で顔を合わせた。川内市のボランティアはこれからの募集となるが、若い方々の意気込みに期待する。日時・場所は、川内市が新しく開発した運動公園「サンアリーナせんだい」で九月七日（土）と決まった。三月初旬の夕方、入来花木会支援会の数人と会場の下見に出掛けた。

いくつもの球技場、競技場、屋内競技場があり、初めて行った夫はその広さや設備に驚いていた。私も、最初和尚さんに案内された時は、これが地方の市の設備かとびっくりしたものだ。

事務局長さんが確保しておいて下さったという場所をあれこれ検討した。背景、舞台の位置、観客席の取り方など和尚さんも加わってあれこれ議論した。やはり一番の問題は音である。車

の音や空調の音、たとえ遠くてもテニスの球を打つ音などが入るとまずい。全体の雰囲気も問題だが、新しく山頂を切り開いた場所なので見渡せば自然がいっぱいである。きつと皆様にも満足して頂ける設営が出来そうだと思った。

それに雨天の場合は屋内の副競技場サブアリーナで行つこととなつて、今までより計画しやすいことがなによりである。

一昨年、お父上の鍔之丞さんを亡くされた観世暁夫さんが、鍔之丞を襲名なさりシテを、子方をお子様の淳夫さんが勤めて下さることになつた。観世さんの鹿島公演は初めてではないかと思う。見逃せないものになる。役所の文書は四月にならないと実効しないといつこととで、チラシの作成が遅れているが、四月には一斉にお配り出来るよう準備している。また鳥追舟のお話などは次回に書かせて頂くことにする。

今年は遠方からもいらして頂けるように、6系統の貸切バスを運行する予定である。こつし

てこの「入来新能」が県下の皆様の例年の行事として定着出来ることを願っている。弱気になりそうな時、いつも励まして下さる上園啓志子さんを始め、「随筆かごしま社」の皆様へ深く感謝している。

